

第8回京都文化芸術都市創生審議会 摘録

日時：平成23年9月1日（木） 午後4時～6時

場所：京都ロイヤルホテル&スパ 2階 翠峰の間

出席委員（敬称略）：

村井康彦会長，池坊由紀副会長，千宗室副会長，井上利丸委員，岡田暁生委員，鈴木千鶴子委員，建畠哲委員，富永茂樹委員，林典子委員，平井誠一委員，山中英之委員，山本淳子委員

京都市：

星川茂一副市長

事務局：

内山修文化芸術都市推進室長，北村信幸文化芸術都市推進室担当部長ほか

- 1 開会
- 2 京都文化芸術都市創生計画の中間点検・見直しについて
- 3 意見交換
別紙のとおり
- 4 閉会

(別紙) 意見交換摘録

<会長>

まずは、今日の我々の会議の目的を確認する。我々は平成22年2月の第7回審議会で、「京都文化芸術都市創生計画」見直しの諮問を門川市長から受けた。そこで政策部会を立ち上げ、審議会委員から池坊副会長と富永委員が関わり、部会での議論を経て答申案としてまとめていただいた。それを本日討議した上で、答申し、それに基づき見直し案が作成される。また、パブリックコメントとして市民の皆さん方の意見を聴取し、改めて練り上げて、計画を策定するという段取りになる。見直し案を討議していく上で、今日の話し合いは大変大事なものであるため、心して時間を過ごしたい。

最初に、部会長をお務めいただいた富永委員に、答申案の趣旨を説明いただく。

<部会長>

平成22年2月の第7回審議会で、市長から創生計画見直しの諮問がなされ、それに伴って政策部会が設置された次第だ。それ以降半年しか時間がなかったが、月に1回ずつ部会を開き、既にある計画を見直し、部会議論に基づき答申の素案を取りまとめた。実質6回では議論が尽くせないということで、非公式の部会（委員全員の出席は見込めないまでも、何人かは集まろうという機会）も2回持った。政策部会の委員は池坊委員と私を含めて6人であり、名簿は資料のとおりである。

そのほか、文化芸術に携わる方々へのヒアリングも、10人を対象に行った。

大変駆け足だったが、部会委員からは大切な意見を伺い、何とかここまでこぎ着けることができた。京都市文化芸術企画課の事務局の皆さんには大変動いていただき、お世話になったので、改めて紹介する。

このような経緯で答申素案を作成したわけであり、まずその内容について、重要な骨子となる部分を中心に報告させていただく。

全体の構成は、第1章 計画の背景と位置づけ、第2章 計画前半期の成果と今後の方向性、第3章 計画の内容、第4章 推進方法、となっている。我々は前半期の取組をまず検討したので、その結論となる第2章3節「見直しの視点と方向性」を御覧いただきたい。

見直しの基本的な考え方として、三つの観点に集約して提示した。その一つは「文化芸術の継承と創造」であり、これは条例以前の京都市芸術文化振興計画（平成8年策定）の時からの問題意識を継承しているとも言えるものだ。これから少子高齢化が進む中で、京都市の文化芸術が将来どのようなようになっていくのかを考えた時、若い人たちの育成により、伝統的に培われてきた京都市の文化芸術を継承し、そして新しい未来へ創造していくということを、まず第一に考えなければならないということである。2番目の「社会的基盤の整備」は、最初の「継承と創造」を展開するには社会的基盤の問題がやはり重要であるという観点からである。それには施設と情報の両面があると考えた。そして3番目には、文化芸術が社会とどのように関わっていくのか、つまり「文化芸術の社会的展開」が重要と考えた。条例でも、暮らしの文化、産業との関わり、文化芸術による地域のまちづくり、といった点が重視されているからである。

以上の方向性に基づき、今後5年間の計画を具体的に示したのが第3章になる。

冒頭の図式において、左側に並んでいるのは、現在の計画の「五つの京都先行プロジェクト」である。これを検討した結果、先ほど申し上げた見直しの視点と方向性により、3点に集約されたことになる。「五つの京都先行プロジェクト」と「見直しの視点と方向性」の間にある破線や実線は、相互の関係を示したものである。

計画後半期をどのように取り組むべきかについては、三つの方向性に対応して「三つの重要施策群」を設定した。重要施策群にどのような施策が含まれるかについても、この図で分かるようになっている。

三つの重要施策群の一つ目は、主として「人材の育成等」であり、三つの具体的施策を挙げている。一つ目は、伝統芸能文化の更なる創生に向けた取組、二つ目は芸術家の育成と活動支援に関わる取組、三つ目は将来の文化芸術を担う子どもたちのための取組である。

重要施策群の二つ目は「創造環境の整備」であり、一番大きな事柄としては京都会館の創造・発表拠点としての再整備である。二つ目には、京都の文化芸術に関わる情報の発信が十分にできていないのではないか、これを充実すべきではないか、という点を掲げた。これはヒアリングでも複数の方から御意見をいただき、我々も痛感した事柄である。三つ目は、情報の発信は市内だけでなく、日本国内、更には海外に向けて進めることが必要であるため、そのコミュニケーションの促進を掲げた。

重要施策群の3番目は「文化芸術と社会の出会いの促進」である。文化芸術は社会の中で存在するものである、というのはごく当然のことであるが、改めて、柔軟な創造性が社会全体に浸透するような取組を進めようというものである。具体的施策の一つ目は、京都の文化芸術は京都の暮らしの中に溶け込んでいるが、文化芸術と暮らしの文化を一層近づけることが重要だとした。二つ目は、祇園祭の山鉾行事のような、地域の伝統的文化行事や祭りを支えている地域住民の活動の大切さに鑑み、これを支援していこうというものである。三つ目は、地域のまちづくりとも関連するが、若手芸術家に居住してもらい、制作・発表をしてもらう空間の整備を進めようという施策である。

このようにして、個人を主体とする世界、市民の生活する地域というある種の集団の世界、その向こうにある社会、それぞれの中で文化芸術がさらに根を張っていく、という形で三つの施策群を考えたわけだ。

重要施策群の後には、70ばかりの「総合施策」を示している。これらに関しては、一つひとつ御説明すると時間もないので省略する。なお、先程から御覧いただいているところで、文章に網かけをした部分は、今回新しく付け加わった事柄である。

以上、政策部会での結論として、抽象的かも知れないが、簡単に説明させていただいた。

<会長>

それでは池坊委員からも政策部会での議論の様子をお話しいたきたい。

<池坊委員>

部会長から御説明いただいたように、内容に関しては変更点も加えて、このような案として上げさせていただいた。私自身、平成19年の創生計画が最初にできた時から委員をしているが、本当にこの数年で、関西広域連合ができ、また、東日本大震災があるなど、まさに我々を取り巻く状況が大きく変わっている中で、文化芸術のあるべき姿の変化をも実感している。限られた半年という期間だったが、委員の日程がなかなか合わなかったこともあって、ゴールデンウィークの最中も利用して、現在の社会の実情に合うような内容と、これまでの数年間の総括、そして今後どうあるべきかということを考えながら、文言の表現や解釈に至るまで詰めて検討した。本日審議会で御意見をいただき、よりよい形にまとめさせていただきたい。政策部会の部会長には部会の意見を献身的に取りまとめていただいたが、そのことも皆様には知っていただきたく、申し添える。

<会長>

人口の小さな都市であれば、こういう計画も極めて明快に議論できるかも知れないが、京都ぐらゐの都市になるとたくさんのものが複雑に錯綜していて、大変難しかったと思う。

なお、私から補足すると、これまでの事業の取組状況とその成果が資料としてあるが、これに基づいて、これからどういう施策をやっていくか(第3章)が整理された。新しく取り組むべき計画は構成上、重要施策群と総合施策群に大きく分けることができる。この二つに軽重はないの

だと思うが、言ってみれば重要施策群はエンジンの役割を果たす推進力になるものであり、総合施策はベーシックな部分を含め、全体的な文化芸術施策である。以下、この辺りを中心に皆さんの御意見をお聞きしたいが、その前に、確認しておきたいという質問があればどうぞ。

<委員>

非常にプリミティブな質問かもしれないが、御説明の中にもあったが、網かけの部分は、新しい施策と考えてよいか。「古典の日」の推進や「国立京都歴史博物館の整備」「キャンパス文化パートナーズ制度の推進」等が新規施策に当たるのか。

<委員>

現行の計画に記載がなく、今回新たに付け加わったものだ。例えば、「古典の日」は、一連の源氏物語千年紀事業の後、現行の創生計画以降に始まったものだ。こういうものがいくつか入ってきている。

<委員>

それでは「キャンパス文化パートナーズ制度」は、今現在あって、引き続き運用する必要があるということか。

<事務局>

「キャンパス文化パートナーズ制度」はそのとおりだ。当初の計画以降に新たに進められた制度である。

<委員>

平成21年に始まった制度だと記憶している。

<会長>

そのほかに質問はないか。なければ、御意見を伺うことにしたい。

<委員>

関わった皆さんのお陰で、内容が練れたものになってきているように思う。

随分前にも言ったが、私は、文化や芸術を語る時に大上段に構えてしまうと、どうしてもしゃちほこぼってしまい、動脈硬化が起こるような気がしてならない。もちろん、理論武装することも必要だが、理論武装という鎧を着る、生身の人間の柔軟性がそこになくては、身動きが取れない状況になると思う。

そういう中で、文化芸術都市としての京都の姿をもっともよくPRしておられるのは、皆さん、どなたと考えられるか。決しておべんちゃらを言うわけではなく、門川市長だろうと思う。あれだけ着物に縁のなかった方がずっと着物を着ておられる。今では実に上手にお召しになる。自分で着物の裏地を選び、帯等も自分でやりくりして、「本当に楽しくてしょうがない」とよく言っておられる。着物を着なければならぬという義務感から始められたことかもしれないが、着物というのは仕立てて身体に馴染むまで5年、10年とかかる。私がこの会議に来る前、先程まで締めていた帯は祖父のものだ。50年前の帯を締め続けて、ああ具合がいいもんだな、と思う。文化というのはそういうものだと思う。

ただ、今まで培ってきた京都の様々な文化は、審議会等できっちりとした型に整理されることなく、ただ漫然とそこにあり続けたと思う。それをここで一つの型にはめてもらったわけだが、今度はこの型にはめたものが、2年や3年で全ての場所に行き渡ることはないだろう。誰もが馴染むようになるにはもっと時間がかかる。市の方でも担当は入れ替わっていくだろうが、着物に

手を通し続けることを面倒くさがないように、人が変わっても着物に袖を通し続けるように、ここで出てきた答申をずっと続けていっていただきたい。

また、長い時間をかけて培われる、世代から世代へと渡されてくる文化のよさを知ってもらえる場を作ることが大事で、そういった環境の整備を、細かくまとめていただいた計画の行間に読み取れるような、啓蒙の仕方を是非ともしていただきたいと思う。

私の茶の湯も、自分たちの世界だけではあるが、全く興味のない人たちでもお茶に触れていただく環境作りに邁進している。茶道資料館に来ていただいた方は、呈茶体験をしていただく。子どもさんが多い場合は石臼を並べて実際にお茶を挽いてもらい、その挽いたお茶を飲めるようにしている。今建てている新しいお茶室は、一般向けに開放できる施設にしていこうと思っている。ふさわしい佇まい、京都に来られる大勢の方に思い出になるような場にするのが、そこに住む私どもの務めだと思う。

京都では色々な文化が様々な場所で息づいている。一つの例がある。ある集まりで私は苦言を呈した。大都市の方が中心の宴会だったが、そこに芸妓さんたちが入ってきた。その時、芸妓さんに対する客の態度が悪かった。その人たちからすると丁寧だったのかも知れないが、私たちから見ると勘違いしているような扱いがあった。私は非常に悔しかったので、最後の挨拶の時に「皆さん、京都は文化都市と言われているが、京都の文化というのは茶道や華道、そういうものだけで作っているのではない。舞妓や芸妓など、皆さん方が勘違いをされているようなことも全て集めて、京都文化のパズルができているのだから、間違いないようにしてください」と言った。

文化に貴賤はないはずだ。だから、素晴らしい計画の提言がなされる中で、他所の人たちが、文化とは高尚なものだと枠にはめてしまわないような形で、もっと細かいものも是非とも拾ってってもらいたい。綿密に作っていただいた計画を前に、多少こういう思いを付け加えさせていただいて、私の意見とさせていただきます。

<委員>

頭が下がるような答申書で、ありがとうございます。1点だけ教えてほしい。新聞報道で「京都会館は歴史的建造物として残してほしい」という声明が出たとあったが、京都会館について、どういう方向で再整備を考えているのか、もう少し詳しく分かればありがたい。

<事務局>

京都会館の再整備については平成14年度から検討を進めており、今年6月に基本計画を策定したところだ。その内容は、第1ホールはいったん解体し、建て替える。第2ホールと会議棟は全面的に改修する、という方針になっている。新聞等でオペラハウス化するという報道もあったが、全く根拠のないことである。第1ホールは、これまでどおり市民の方々に利用していただくとともに、これまでニーズに合っていないと敬遠されていたポピュラー系の音楽を含め総合的な舞台芸術が上演できるような舞台機能を持つ施設にしたいと考えている。第2ホールについてももう少し舞台機能を高め、演劇や伝統芸能を上演しやすくする方向を考えている。また、会議棟については、現在多目的に使っているが、さらに小ホール的なものを整備して、会議または舞台芸術など、いろいろな用途に使えるような形とするとともに、会議室は芸術作品の制作に使えるよう整備したい。

23年度は基本設計を進め、24年度から実施設計、そして実際の建築を進めていきたいと考えている。

<委員>

計画の見直しは大変な作業量になったと思うが、お忙しい中、何回も集まってまとめていただき、ありがとうございました。

今、京都会館のお話が出たが、動物園についても市長は素晴らしいものにすると言われている

し、岡崎全体について大きなビジョンを持って考えておられると思う。私は市美術館に何回も行きながら、最近やっと、素敵な建物だと気づいた。美術館自体の建物の魅力を感じた。

正直に言うと、京都会館は有名な建築家が建てたもので立派ではあるが、素敵と思ったことがなかった。私の生まれた年に建築され、老朽化と言われるのも嫌なのだが、建物自体があまり魅力的に見えないのは、メンテナンスができていなかったのからではないかと思う。市美術館も壁が綺麗ではないので、建物自体のメンテナンスにもう少し気を配る方がよい。岡崎地域全体を見れば、緑も多く疏水もあって、場所自体に魅力がある。建物も含めて複合的な魅力を持っている地域だから、メンテナンスのことも視点において岡崎地域全体を考えてもらいたい。

<会長>

岡崎地域全体に関わることだが、これについて事務局で説明いただけることはあるか。

<事務局>

御指摘のとおり、岡崎地域には、京都会館、動物園、市美術館等、文化施設が多数立地している。京都会館は築50年だが、美術館はもうすぐ80年。それぞれの時代に、高い評価を得た建物が残っているのは事実だ。その中で、現代的なニーズにどう対応するかについて整理を進めているようにしている。京都会館は、先程申し上げたように舞台機能を高めようとしている。動物園についても、もっと身近に動物に触れてもらえるよう整備を進めていきたいと思っている。美術館については、基本的には現在の建物を残す形で、機能を高めるような整備をできればやっていきたい。これは予算上、オーソライズされたものではないが、担当部署の考えとしては、岡崎に立地する他の施設と連携して、今後は整備を進めていきたいと考えている。

メンテナンスの件は、耳の痛い話だ。役所は本当に単年度主義で、減価償却では、メンテナンス費用を確保することがなかなか難しい。今後、京都会館の整備に当たっては、メンテナンスも含めて検討していきたい。

<会長>

今、外壁等の話が出た市美術館は、私も3月まで館長をしていたが、空調など見えないところの整備に何億円と投入してもらった。そのことが外からあまり見えないのが残念だが、精一杯、頑張っているところである。

<委員>

私の意見は2点ある。「文化芸術に関する社会的基盤の整備」のところで、「これらの情報が市民に十分に行き渡っておらず、京都の文化芸術の全体像は必ずしも明確に理解されていません」というところは私も日々感じていることだったので、これを明記されたのはとてもよいと思う。これをもっと行き渡らせるために「網羅的なデータベースを作る必要がある」と書かれているが、これはどこの機関がすると考えたらいいのだろうか。京都の文化芸術のコア部分を担っている芸術センターに期待すればよいのか。それとも、京都市なのか。

<委員>

御指摘の部分は、重要施策群では「京都芸術センター事業等による情報機能等の充実」に連動する。まだそれ程具体的に考えているわけではないが、既に芸術センターでもその方向での検討を始めてはいる。この施策項目の中で、名指しで挙げられているわけだが、こういう事業を行うためには色々必要なものが出てくる。この計画が改定された暁には、市と協議したいと考えている。

<委員>

データベース化は必要なことだと思うので、今後積極的に進めていただきたいと思う。

2点目は、「継承と創造に関する人材の育成等」だが、私が日々思っているのは、アーティストの育成も非常に大事だと思うが、それと同時に、京都を紹介する総合的なプロデューサーや京都を発信するプロの育成（言語の修得も含めて）も入れていただきたいと思う。

<委員>

何もかも芸術センターに集中しそうで大変だが、それはセンターの発足時からの重要課題の一つである。ヒアリングの中でも随分その話題が出ていた。例えば、伝統芸能に関しても、既に芸術センターが始まって以来続けている事業があるが、確かに日本語ばかりだ。まだ検討中なのではっきりとは言えないが、今年から採用したプログラム・ディレクターを中心に、事業の英語版、さらには仏語版まで作ろうかということは言い始めている。

もう一つは、京都では、景観の中で文化が展開していることが重要だと思う。ヒアリングの中でも、京都の文化芸術を紹介するため、景観の中で文化が展開するというテーマで映像を作ってはどうかという提案があった。

芸術センターだけでなく、色々なところでそういうことを考えていただければと思う。

<委員>

読み応えのある素晴らしい答申書を作ってください、ありがとうございました。

私は、この審議会では、ずっと経済と文化という話をしてきた。「文化芸術の社会的展開」のところに記載していただき、先が明るいなと楽しみにしている。

ただし、具体的に進めていく中で少し不安感を抱く部分がある。「第4章 推進方法」だが、経済界がどのように関わり、お手伝いさせていただくことができるのか。NPO等の団体や企業等の役割分担が書かれているが、企業の役割としては「文化芸術の理解者、支援者となることにあります」となっている。進めていく主体者になる、という雰囲気が感じられない。守るだけでなく、売り出していくための役割は経済界にもあると思う。具体的には、商工会議所等が関わられるのではないかと。

全般を見ると、工芸品と美術品は、技術面ではあまり差はないように思うので、私は、経済界と文化界がもう少し連動しながら、一つのものを売り出していくということがあってもいいのではないかと日々思っていた。P21では、そういう部分が不十分だと謳っていただいたのだろうと思う。

その中で感じるのは、総合施策の「文化芸術に親しむ」で、市民が文化芸術に親しむことができるような機会を設けるという施策が載っている。片や、「産業と結び合う」の中では観光産業やコンテンツ産業との結びつきについて書かれている。予算等が潤沢に持てない中で、市民が親しむ機会、観光客が親しむ機会、産業との融合等を何とか一つの施策で行えないだろうか。一緒にやることで推進力が高まらないだろうか。市の部局でいえば、文化市民局と産業観光局がタイアップしながらやると、もう少しこの辺りの溝が埋まるのではないかとということだ。そこに経済界が加わることによって、外向きの力も増していくだろう。確かに、市民が文化に親しむ機会を拡充するという事は素晴らしいし、それが観光客の望むものと一致して、トータルで質の高い観光を目指すことができればもっとよい。オール京都で、そんなふうによく融合させながら取り組んでいくことができればと思う。

そういう意味で、経済活動と文化の関わりについてここで触れていただけたことは大変ありがたい。私も商売人の1人として片隅でお手伝いできればと思う。

<委員>

前半期の「五つの京都先行プロジェクト」が大きく三つに整理され、人材を育て、環境を整え、

社会との繋がりを作っていく、と非常に分かりやすくなった。

答申自体には全く異論はなく、これを実行していただければ結構だが、中でも、私が以前から思っていることが書かれているので、是非実行していただきたい。それは、「芸術家の育成・活動支援」の部分、「京都市文化特別奨励制度を引き続き実施すべきです。実施に当たっては、奨励者の活動のエネルギーが京都のまちに還元されるよう、一層効果的な運用を図ることが望まれます」とある箇所だ。この奨励制度は10年以上続けておられるが、京都の音楽や美術、演劇等の分野の若い人を公募し、選ばれた人が1グループ当たり300万円の奨励金を得て活動するという内容のものだ。これは行政がパトロンになって作家を育てるということであり、非常にユニークな制度として注目されている。ただし、300万円を受けて定期的な報告義務はあるものの、どういう活動をやったかという成果発表の場がない。市民からすれば、奨励制度で選ばれた人はどんな人なのか、どんな活動をやっている人なのか分からない。だから、奨励制度を受けて1年後ぐらいに発表の機会を作り、それを市民が見られるようにすることが大事だ。税金の見返りを求めるという意味ではなく、市民と分断させず、市民とともにアーティストを育てていくという形が必要なのだ。

また、一つ質問だが、「国立京都歴史博物館（仮称）の整備に向けた取組」について、私はよく知らないが、いつ頃からこういう構想があって、今現在、どういう状況になっているのか。国立というからには、国に作ってもらおう施設だろうが、現状を教えてください。

<会長>

私自身が京都市歴史博物館構想に関わったので、後の質問の方からお答えしたい。平安建都1200年の頃だったろうか、榊本市長時代に京都市立歴史博物館という構想が作られた。それが基本計画に入ったところで足踏み状態に入って、そのうちにやはり京都市ではなかなか財政的に難しいから、国立であるべきだということで舵を切った。市立であろうと国立であろうと、構想の中身が変わることはあまりないから、何人かの委員はそのまま委員会に残って議論してきた。国立にしても目下の状況では実現は非常に難しいだろうとは思っている。ただし、いつでもスタートできるよう、議論は継続しているという状況だ。

有体に言うと、九州に作られた国立博物館は、地元が土地もその他の経費もほとんど用意して提供したのだから、実際には地元が作ったに等しい。大きな違いは、残念ながら京都にはその力がない、という点である。

また、国立の歴史博物館は既に千葉県佐倉市に存在する。私自身は、歴史博物館は京都にあって初めて意味があると思うが、二つ目を作るとなると余程の理論武装をしなければ実現しない。我々は「京都の歴史と文化が日本文化の元にもなっているのだから、京都になければならないのだ」という気持ちがあるが、他所からは、何故京都なのだ、という反応しか出てこない。それを突破するのはかなり難しいだろう。以前委員会にゲストで招いた方も、「九州では大陸との関係を主題として展示をすることを目的として、国立博物館の設置にこぎつけた。新たに国立博物館が作られるとすれば、次はアイヌ民族等先住民族をきちんと扱う歴史博物館だろうと思う。京都は3番目だ」と言われた。国立で考えても20年、30年かかる話だ。それを何とか突破するためには、京都において、歴史博物館の持つ意味を市民の皆さんに理解してもらうことが必要であり、京都の経済界の理解も得なければならない。挫けることなく、頑張っていくしかないと思っている。

前者については、何か御意見はあるか。

<委員>

長く関わっている者として申し上げるが、確かにおっしゃるとおりだと思う。制度ができて10年になり、今年ももうすぐ選考が始まる。奨励者には、様々な形で京都市の事業その他に参加してもらいたいということで、市民にあまり知られていないかも知れないが、市の「京都創生フォーラム」で、奨励を受けたピアニストに演奏してもらうなど、発表の場は設けられている。市の

事業以外にも、御自身でも公演や発表をされているが、発信が不十分であることは正直に認めるので、これからは積極的に発信していきたいと思う。委員の御発言は、それを制度的なものにした方がよいという御意見かと思うが、お聞きしながら、私も芸術センター等で発表の場の開催をもっていく必要がもっとあると考えた。

<委員>

発表する人は奨励制度を受けたアーティストだ、と分かるような形で発表してもらった方がよい。

<委員>

もちろんそうだ。例えば、京都市とは全く別のところで御自身が発表される時でも、チラシ等に市の奨励制度を受けたと明記していただくようお願いしている。チラシのごく一部で、あまり目立たないかも知れないが。

<委員>

充実した答申案になり、ありがとうございます。専門は古典文学なので、総合施策のところ「古典の日」の推進を入れていただいたことはとてもありがたい。「古典の日」は平成20年が源氏物語千年紀で、21、22、23年ときて、今年で一つの節目になるのだが、答申に入れていただいたということは、今後も具体的に京都市の施策として行われるのだと安心した。

もう一つは全体的なことに関わるのだが、この答申書でまず確認しなければならないと思って読んだのが「社会状況の変化」であり、中でも特に、「東日本大震災と来るべき社会のビジョン」の部分だった。未曾有の大災害を機に、文化の位置付けをどう捉えているか。私は文化というのはもっと根本的な位置付けにあると思っている。もちろん、そう考えておられると思うが、「東日本大震災からの復興の中で、文化芸術が必要になることが必ずあります」ではなくて、現にもう必要になっているのだ。文化とは飾りでなく、地域が生きる根本に関わることだ。大震災の被災地でも、地域のお祭りがコミュニティを再形成して、地域の人々の心の支えとなっている部分がある。京都市もそういう気概を持って、もう少し文言を練っていただけたらと思う。

そういう目で見えていくと、第1章の冒頭に「京都の文化芸術は、長い歴史の中で脈々と息づきながら、社会への影響力を持ってきました。」とあるが、この書き方だと京都の文化というものが、京都と別物のような気がある。また、あちらこちらに「京都らしさ」とあるが、「らしさ」という言葉がそぐわない気がする。京都を京都たらしめているのが文化である、というぐらい、根本に文化があると思っている。そうした自信を持って文化行政に携わっていただきたい。私たちこそ主役だ、という気概が感じられる文言が欲しいなと思いながら拝見した。

全体に関しては、異論はない。

<委員>

今日は答申をまとめる最後の審議会だ。初めて来て言うのも何だが、草稿を受け取ってから、これだけは言いたいと思っていたことがある。「東日本大震災と来るべき社会のビジョン」の部分で山本委員が言われたことと同じだ。「復興の中で、文化芸術が必要になることが必ずあります」というより、もっと積極的に打って出てもらいたい。

私は阪神間出身で、阪神大震災の体験がある。1年、2年は住宅等の問題が大きかったが、3年以降、5年、10年と経つと、大きな意味での文化の力が、被災地、被災者を後押しする。1300年前の東北の津波の縁もあって先頃、祇園祭の鉦と囃子が仙台の七夕祭りに参加した。私もついていったが、現地の人に大変喜んでもらえた。京都という日本の文化の中心地が東日本を応援するというのは非常に大切なことだ。私は外から見るから思うのかもしれないが、京都の持つ文化の力は、京都人が思っている以上に力強いものがある。折角「東日本大震災と来るべき社会のビジ

ョン」という項目で文化の話を書くのならば、具体的施策の中に東日本の被災地を文化の力で励まして、手助けをする、積極的に助成・支援するといった施策も書いて、取り組んでいただきたい。創生計画は大綱だから、そういう細かいことまで書けないかも知れないが。

<委員>

総花的だと最初は思ったが、部会長の御説明を聞くと、非常に細かいところまで具体的に指摘され、よくできた見直し案だと思う。私は、市立大学に勤めているので、第三者的なコメントはしづらいところだが、今日は外部からの委員という立場でいくつか話をしたい。

私はもともと京都に長く住み、大阪に一時移った後、京都に戻ってきた。今は大学に勤務するが、美術館勤めが長かった。日本でも外国でも、美術館というのは都市にとってシンボリックな存在だ。私が美術館人だからそう見えるというだけでなく、観光客にとっても、アーティストや文化人にとっても、美術館はかなり大きな意味があると思う。しかし、京都を外から見ていると、京都市美術館の比重はとても小さい。私は近代美術が専門だからかも知れないが、芸術センターには寄るが、市美術館には寄らないで帰ってしまうことがしばらく続いている。

私が京都に住んでいた子どもの頃のイメージでは、市美術館の求心力は今よりもっと大きかった。市美術館の内情については会長の方が詳しいだろうが、私が国立国際美術館に勤めていた時代、市美術館は学芸員の数も多く、予算もあり、自主企画も多かった。今は随分衰退してきた感じがある。今後はそれを盛り返そうという考えだと思うが、美術館の位置付け、学芸員の処遇という問題がある中で、もっと創意工夫できる部分もあるのではないかと、非常に残念に思う。今の施設はもちろん改装も必要だろうが、色々な工夫をすれば、それ程の巨費を投じなくても、かつてのような存在感と求心力のある、全国に向けた発信力のある美術館になるのではないかと。若い人たちが芸術センターを活発に使って、大量観客動員という感じではないが、他の地域にもアピールできる施設になっているのを見ると、余計にそう思う。是非、力を入れていただきたいところだ。

もう一つは、京都には素晴らしいアーティスト、文化人が住んでおり、芸術系大学がいくつもあり、その人たちを京都に定着させるような方法が大事だと思う。京都は国際的に注目されており、海外からアーティストたちが来たがる都市だ。例えばフランス政府が運営するアーティスト・イン・レジデンス施設、ヴィラ九条山（関西日仏会館）が京都にある。仏政府のアーティスト・イン・レジデンス施設は世界に二つあり、一つはイタリア・ローマの「ヴィラ・メディシス」で、もう一つがここ京都だ。非常に希望者が多い。もし海外から受け入れるようなアーティスト・イン・レジデンスを作れば、かなり発信力も求心力もある施設になると思う。これはそれほど巨費のいるものではないはずだ。今、世界中のアーティストたちが行きたがっているのはベルリンで、そこにはクンストラーハウス・ベタニエンなど、いくつかのアーティスト・イン・レジデンス施設がある。場所は提供するが、経費はそれぞれの国やアーティスト自身が持つというシステムだ。京都でも十分それが可能だと思う。是非、海外に向けて発信し、海外に対する求心力を持っていただきたい。

また、京都は国際文化都市を標榜しているが、韓国や中国、他のアジアに比べても日本は本当に特殊な国で、美術館にも大学にも文化施設にも、外国人がいない。欧米は当然だが、中国でも韓国でも外国人のキュレーター、館長を雇うということはよくある。もちろん、言葉や契約など難しい問題はあると思うが、国際化と言いながら、どんどん孤立しているように思う。人材の交流は積極的にやっていただきたい。

なお蛇足だが、市立芸大は来年の法人化に向けて準備を進めており、その中で、まだお墨付きをもらったわけではないが、アーカイバル・リサーチ・センターの新構想を出している。今の問題は、京都のまちには様々な文化のポテンシャルが記憶されているが活用できていない、クリエイションに結びつけられていない、ということだ。記憶を創造に結びつけるというのは創造のための当然の原理で、やはり専門性が必要だから、大学の役割だと思っている。従って、他の大学、

美術館、アーティストたち、伝統産業、色々な企業とタイアップしながら、今、死蔵されている豊かな資源を活用する活動をアーカイバル・リサーチ・センターで行おうとしている。

<会長>

一とおりの御意見を頂いたが、欠席された方で、御意見を寄せていただいた方がおられるので、事務局から御紹介いただく。

<事務局>

それでは、事務局から紹介させていただく。

「3月11日の東日本大震災は様々な教訓を京都市民にも与えたと思います。京都においては、約30年以内に大地震が起こると予測されています。京都市が今後も文化芸術都市としてあり続けるためには、有形無形の文化財及び文化芸術に欠くべからず有形の諸財産を災害から守り救出するための、より具体的な施策が必要なのではないかと感じています。参考資料P48に「文化財を保護し、及び活用するための施策」として、47番から53番の施策が掲げられていますが、文化財の保護については独立した施策として、活用とは切り離して考え、推進してゆかねばならないことのように考えます。災害時の文化財のレスキューといった括りで、新たに施策の枠組を作ってみてはどうかと感じています。」

以上。

<会長>

町家の文化財の保存に一生懸命になっておられる方なので、こういう御意見が出てくるのも必然だろうと思う。

<委員>

色々な御意見、ありがとうございました。文言の表現、どんな言葉を使うかによっても表される内容が異なる。先程も御指摘があったが、「東日本大震災と来るべき社会のビジョン」については、政策部会でも最後までなかなか書き切れなかった部分でもある。これからの参考として活かしていきたいと思う。私自身、今回政策部会に関わって改めて、学術や日々の暮らしの営みや色々な文化に関わる（文化を生み出したり、支援したりする）色々な形の文化のサポーターがいるという、京都の財産の豊かさを実感した。

今回の見直しでは、何も専門の人だけが読むのではない、他府県の方が読んでも、子どもが読んでも理解できるような文言で、一人ひとりに浸透するような案を作っていきたいということが部会委員の総意だった。こういう計画は、携わる人は読んでも、一般にはなかなか見ていただけないという現状がある。せつかく色々な方の意見を網羅しているので、できるだけ多くの方に読んでいただいて、柔軟に運用できるものにしていきたいと思う。

<会長>

委員の皆さんには長時間御討議いただき、本当にありがとうございました。この創生計画は、スタートの当初から骨格が非常に明確だったと思う。今回の折り返し点では、前半期の成果、不十分だったところ、色々あるかと思うがその反省の上に立ち、新たな意欲を持って、後半期も取り組んでいかなければならない。その際に大事なものは、このような整理だろう。皆さんから御意見があったように、私も非常にしっかりした報告書になっていると思うが、詳しく読めばまた色々なところで不十分さもあるかと思う。今日、長時間にわたって御意見いただいたことを踏まえながら、さらにまとめていきたい。

まとめ方についてだが、一つひとつをこういった会議をもって決めていくのは事実上難しいことだと思うので、部会長、池坊委員と事務局とも相談しながら、まとめていければと思う。僭越

だが、それについては私の方に任せていただけるだろうか。(拍手)

それでは、できるだけ真摯に受け止めて責任を果たしていきたいと思う。それから、改めて部会長には案の作成に御苦労いただき、御礼申し上げます。

<部会長>

今日は、皆様から色々な御意見を承り、大変ありがとうございました。まだ至らぬところがあったと反省しながら、御意見を活かしていきたいと思う。

ただ、一つだけ、お願いしたいことがある。再度取りまとめた結果答申が出ることになるが、これで終わりではない。この答申が計画となって実践されていく時に、今日お集まりの審議会委員の皆さんには、また改めてそれぞれの分野で御意見を伺い、あるいは色々な形で御協力をお願いする必要が出てくるだろう。その辺りをどうかよろしく願います。

<事務局>

今後の予定について御説明する。本日、御議論いただいた内容を答申案に反映させた後、答申としてまとめていただき、会長、部会長から門川市長にお渡しいただくよう考えている。答申をいただいた京都市としては、計画改定の素案を策定して、11月頃にパブリックコメントを募集したい。その市民の皆さんの御意見を反映し、京都市内部でも調整した上で計画案を固め、来年の1月下旬を目途に、改めて審議会を開催させていただき、御確認をいただきたいと思う。最終的には来年3月末に計画改定版を策定する予定で考えているので、引き続きよろしく願います。

<会長>

長時間御意見をいただき、本当にありがとうございました。

<事務局>

それでは最後に、京都市を代表して、副市長から御挨拶を申し上げます。

<副市長>

今日は、お忙しい中、長時間ありがとうございました。半年にわたり富永部会長、池坊委員に御苦労をいただき、その報告に基づいて積極的な有意義な意見交換をしていただいた。心から御礼を申し上げます。委員の先生方のそれぞれの御提案、御発言は頂くものばかりだった。その中で、特に、文化の位置付けについて根源的なお話があった。この計画を最初に作った時、私は副市長として担当しており、委員もしていたのだが、お話をお聞きしながら、最後の審議会で「文化芸術なくして京都はありえない」と申し上げたことを思い出した。今日いただいた御意見に基づいて、答申をまとめていただくが、しっかりと計画に反映していきたいと思う。

文化芸術都市を創生する、ということは全庁的な話だ。文化芸術都市創生計画は芸術分野に特化した計画ではあるが、他分野との連携を図ることが重要であり、本日の御議論を踏まえて、私どももしっかりと頑張っていきたいと思う。本日は本当にありがとうございました。

<事務局>

以上をもちまして、第8回京都市文化芸術都市創生審議会を閉会させていただきます。皆さん、大変ありがとうございました。